

「スイスのことをテレビで観たよ」とか、「新聞でスイスの記事を見つけたよ」と日本の家族や友人が嬉しそうに報告してくれると、自分のことを忘れずに生活してくれている人達が祖国にいることに、心が和んだりする。チューリッヒのコンサートで聴いた音楽が日本語版CDとなって日本でも買えたら、同じ音楽を分かち合え、感想を語り合ったりしながら日本ともっと近く繋がっている気がしないだろうか。

今まで輸入版としてのみ販売されていたフィルハーモニア・チューリッヒ(元チューリッヒ歌劇場管弦楽団)のCDが、キング・インターナショナルから日本語版CDとなって9月に発売される。その収録曲『幻想交響曲』は2013年9月29日のコンサートのライブ録音で、フィルハーモニア・チューリッヒが立ち上げた独自のレーベル『フィルハーモニア・レコード』のCD第1弾である。

ここ数年でチューリッヒの音楽シーンは大きく変化した。クラシック音楽界の2大柱のひとつであるトーンハレオーケストラは、18年音楽監督を勤めたディビッド・ジンマンに代わって、若手のフランス人、リオネル・ブランギエを選んだ。評判は良いが、まだ未知数ではある。

そしてもうひとつのチューリッヒ歌劇場では、21年間君臨した総裁のアレクサンダー・ベレイラの後、アンドレアス・ホモキが新総裁に、ファビオ・ルイーシが音楽総監督に就任した。ドイツ人演出家のホモキの意向でドイツ発のレジータター(作品のオリジナルな時代設定にとられない読み替え演出)が主流になり、相当な数の保守的な観客が年間契約を解消してしまっただけではない。

一方、音楽面では音楽総監督のルイーシのもと改革が行われた。まず、「オペラのみならず交響曲でも一流の演奏を披露できる」オーケストラとして世界に周知させるため、「訳する必要のないグローバルな名前」を求めてフィルハーモニア・チューリッヒと改名された。

彼らはこれまでも年に6回前後のシンフォニーコンサートを組み、オペラレパートリー以外の楽曲に常に取り組んで来た。「オーケストラピットの中だけで演奏していると、オーケストラ独自の音楽性が発展できない。舞台上に乗り、歌手の伴奏から抜け出す経験が必要だ」という。現在1シーズンで250回前後のオペラ、バレエ公演の他に7、8回の交響曲コンサートを実現させ、さらに室内楽コンサートも充実させているのである。そうした努力が実り、2000年にはドイツのオペラ専門誌『オーパングヴェルト』が選ぶ『年間最優秀オーケストラ賞』を受賞している。

ルイーシは、オペラ指揮者にありがちな独裁的なマエストロではない。常に明確な表現の方向性を持ってはいるが、それを押し付けることはしない。楽団員は何よりも、「畏れを抱きながら演奏しなくてもよい」この関係を満喫しているようだ。こうして創り上げられたCDを拡散して、前衛的な演出で低迷しているチューリッヒ歌劇場を再び盛り上げようという意図も感じられる。

『フィルハーモニア・レコード』のCD第1弾としてベルリオーズ作曲『幻想交響曲』が選ばれたのは、意義深いことに感じられる。その理由として第一に歴史的背景が挙げられる。このオーケストラの歴史を紐解くと、1830年にベルリオーズが『幻想交響曲』を完成させた時代とつながる。チューリッヒ歌劇場の前身である『Aktientheater(株式劇場)』は1834年からオペラを上演しており、それらの公演を担っていた30人ほどの楽団がフィルハーモニア・チューリッヒの源泉である。従って、この曲が生まれた当時の音楽に触れていたオーケストラなのである。

その後、1858年からチューリッヒへ亡命していたリヒャルト・ワーグナーが、自分の作品を自らの指揮で上演するためにオーケストラ団員を70人に増員させている。そして1944年にはスイス初のラジオ・オーケストラが放送局から解雇されたため、この全団員をも受け入れ142人の大所帯となり、シンフォニーグループとオペラグループに分けられて活動を続けた末、1985年にトーンハレ管弦楽団とチューリッヒ歌劇場管弦楽団に分割された。その年から30周年を記念して作られたのが『フィルハーモニア・レコード』なのである。

チューリッヒ歌劇場管弦楽団の芸術監督はヴァイケルトから、ヴェルザー=メスト、ガッティと移っていくが、その間にハイティンク、フォン・ドホナーニ、サンティ、メッツマッハー、メータなど多くの一流指揮者の元でオペラを演奏してきた経験は、オーケストラの奏でるフレーズを「歌わせる」勉強になったという。そこにこの選曲が意義深いと思わせる第二の理由がある。ドラマティックな音楽的盛り上がり表現するのが日常の彼らにとって、後に「楽器によるオペラ」とも呼ばれたこの交響曲は彼らの長所を發揮できる最適の楽曲と言えるだろう。

ベルリオーズ自身が『ある芸術家の生涯における挿話』という副題を与えたことで彼の自伝的作品というレッテルを貼られてしまっているこの交響曲は、恋に破れて恋人を殺し、そのために斬首刑に処されるという、悪夢とも、阿片による幻覚とも言われるストーリーに沿って展開されている。実際ベルリオーズは1827年のパリで、シェイクスピアの『ハムレット』にオフェリア役で出演していたアイルランド人の女優、ヘンリエット・スミスソンに一目惚れするが、まだ無名だった彼が有名女優に相手にされるはずもない。彼はその失恋体験を昇華させた『幻想交響曲』で時代の寵児となり、時を経た末にはその女優と結婚するに至るのである。

そんな野心と成功物語を秘めたこの交響曲でスタートを切った『フィルハーモニア・レコード』からは、既に販売されている第2弾のワーグナーCD(2枚組)に続き、第3弾となるラフマニノフのピアノ協奏曲も発売が決定している。9月末のコンサート曲目であるブルックナーの交響曲第8番も、10月にスタジオ録音するという。DVDシリーズも『リゴレット』が発売されており、先シーズンにプレミエを迎えたオペラ『カプレッティ家とモンテッキ家』も製作予定だという。

フィルハーモニア・チューリッヒには日本人コンサートマスターも活躍しており、また、引退まで勤め上げた日本人もいたせいか、親日的である。日本ツアーでの思い出を大切にしている楽団員や、日本語をプライベートで学んで上手に操り、合気道を極めている人もいる。チューリッヒに住む者として、このレーベルを応援していけたら、と思わずにいられない。

日本の家族や友達と共通の目的でつながりたくなったら、以下の処方箋をお試し下さい。今後のCD展開を楽しみにしつつ、国境を越えて「同じ団体を応援するサポーター的絆の構築」で心が温まります。



第15回 チューリッヒ発信のCD

フィルハーモニア・チューリッヒ

- 日本語版CD ベルリオーズ作曲『幻想交響曲』
- シンフォニーコンサート

9月27日(日) チューリッヒ歌劇場

アントン・ブルックナー作曲『交響曲第8番ハ長調』

指揮 ファビオ・ルイーシ [www.philharmonia-records.com](http://www.philharmonia-records.com)

